

D-9 児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について（第8報）

—（その2）離乳の時期と知能との関係—

宮崎大教育 ○秋山 露子
芝尾 美子

1. 本報は中学生124名、小学生430名、幼稚園児157名、3歳児89名を対象として、乳児期の栄養法別による離乳の時期と知能との関係についてそれぞれ統計的に分析し、総合的に検討し、離乳の時期と知能発達との関係を明らかにする事を目的とした。

2. 乳児期の栄養法を生後6カ月以内の栄養法別に母乳、混合、人工栄養法の3つに分類した。知能発達は、中学生は京都大学NX式小学生は教研式新制学年別知能検査、幼稚園児は教研式幼稚園知能検査甲式、3歳児は愛育研究所乳幼児精神発達検査を用いて調査した知能偏差値を用いた。

検定法は母分散の均一性をF検定で検定し有意差の認められなかったものについて平均の差をT検定で検定し、有意差の認められたものについての平均の差はコクラン・コックス法で検定を行なった。

3. 平均知能偏差値は9カ月以内が最も高く、10~12カ月、13カ月以後の順であった。又極上位知能偏差値も同様の順であった。極下位知能偏差値の比率は9カ月以内が最も低く10~12カ月13カ月以後が共に高かった。栄養法別では母乳は9カ月以内、混合は13カ月以後人工栄養は、10~12カ月が最も知能が優れていた。極上位知能偏差値の比率は、母乳、混合共に9カ月以内が上位率が高く、全体として離乳開始の時期の早い程極上位の頻度が高く、極下位知能偏差値の比率は全体として離乳開始の時期の遅い程極下位頻度が高かった。